

手をあててみる ● 笹本碧

月面より呼ばれる心地手術室八に入ったはずの吾だが
月面に居たのは吾のほうだったばんやりばんやり地上へ戻る
看護師の吹き出したちが行き交いぬ血圧体温酸素飽和度
地上から七十センチを運ばれる薄目で廊下の灯りを追いつつ
両親が両脇に居てくれることこんなにも親不孝な幸^{しあわせ}
点滴機かぼわんかぼわん働いてがんセンターの夜回りゆく
水分子しみこんでくる飲水を許可されくくと飲み込む朝に
お隣にサンドラさんが入院し英語まじりの午後が広がる
三日目に歩行訓練始まりぬまるで海から上がったクラゲ
看護助手早川さんは同じ年母でもある手がきびきび動く
残された左の側の卵巣に手をあててみる浴衣の上から
日のおたるロビーに切らず置かれあり医療用ウィッグのパンフレットは
緩和ケアチームの林先生に言われる「薬も味方ですよ」と
春一番吹きしニュースを聞きながら初めて飲み込むオキシコンチン
病棟を三周散歩する間夕日は二センチ動いていたり
雪の朝センター一階奥深く放射線科へ診療にゆく
放射線治療室 A に横たわる BGM は榎原敬之
うすみどりの満月そそぐ駐車場ここから帰れる人々のため
回診の声が近づく 背を伸ばし闘うための熱をはかりぬ
あの青い車は今日も同じ位置同じ向きにて停まっておりぬ

受賞の言葉—— 笹本碧

東京新聞の歌壇欄に初めて投稿してから六年半。最初は少しずつ、「心の花」に入会してからは劇的に、自分の内外の世界が変わりました。先輩方・仲間と共に自分なりの歌を模索することが、いつの間にか大きな支えになっていました。病気が判明した時もそうでした。暫くは様々な感情や不安が渦巻きましたが、「私には、短歌がある」と思ったとき、体の奥底から力が湧くのを感じました。幸綱先生、選考委員の皆様へ厚く御礼申し上げます。また、闘病を支えてくれている家族にもこの場を借りて御礼を言いたいと思います。本当にありがとうございます。これからもこつこつと歌を作り続けてゆきます。よろしくお願いいたします。

